

## ブック・エッセイ

### 戦争の時代の平和構築

福田 幸正  
グローバル・グループ 21 ジャパン

セヴリーヌ・オトセール（山田文 訳）、2023、『平和をつくる方法 ふつうの人たちのすごい戦略』、柏書房。（Séverine Autesserre. 2021. *The Frontlines of Peace: An Insider's Guide to Changing the World*. Oxford University Press.）<sup>1</sup>

\*\*\*\*\*

著者のオトセールは、開発途上の紛争国での平和構築活動経験が豊富なフランス人の研究者である。現在、コロンビア大学バーナード・カレッジで政治学教授として教鞭をとっている。

平和構築（peacebuilding）という用語は、東西冷戦の終焉を境に頻発した民族間、宗派間の紛争の解決のために、国際社会が取り組んだ際に多用された。それは、単に紛争のない状態（消極的平和）ではなく、紛争の要因のない状態（積極的平和）を創出するため、紛争の要因を積極的に取り除き、平和を定着させる新たな社会の仕組みを作ることの意味している<sup>2</sup>。平和を定着させる新たな社会の仕組みとは、効果的な公的制度であり、その基礎は、憲法に基づく法による支配である。特に紛争後の途上国では、国民の公的制度に対する信頼が回復されなければならない。そのために国家は、国民の命と財産を守り、人が人らしく暮らせるために必要な基礎的サービスを提供するという、基本的な義務を果たさなければならない。一方国民は、参政権を行使し、自ら国のあり方を決める。平和構築とは、そのような国家と国民の関係の好循環を始動させるものである<sup>3</sup>。

平和構築に駆けつける国際機関や各国の ODA 実施機関は公的機関であり、途上国の政府が主な相手となる。ところが、特に紛争後の政府は脆弱であり様々な問題を抱えている。その結果、いかに国際社会が善意に満ちていたとしても、平和構築は大抵とん挫す

---

<sup>1</sup> オトセールのホームページでの本著紹介

[https://severineautesserre.com/sa\\_book/the-frontlines-of-peace-2/](https://severineautesserre.com/sa_book/the-frontlines-of-peace-2/)

<sup>2</sup> JICA、2020、「平和構築支援 JICA の取り組み」、2 頁。

[https://www.jica.go.jp/Resource/publication/pamph/ku57pq00002iqnxw-att/commitment\\_peace.pdf](https://www.jica.go.jp/Resource/publication/pamph/ku57pq00002iqnxw-att/commitment_peace.pdf)

<sup>3</sup> （参考）コフィ・アナン国連事務総長、国連平和構築委員会発足記念スピーチ、2006 年 6 月 23 日

<https://unis.unvienna.org/unis/en/pressrels/2006/sgsm10533.html>

る。例を挙げれば枚挙にいとまがないが、日本も含めあれだけ国際社会がテコ入れしたアフガニスタンの平和構築が大失敗に終わったことは記憶に新しい。

それでは何が問題であったのだろうか。オトセールによると、それは平和構築が「定型・トップダウン・アウトサイダー主導」だったからであり、その真逆の「柔軟・ボトムアップ・インサイダー主導」の視点を組み入れなければならない、と主張している。定型とは、代表的なものとして紛争経験国の状況を見殺しにした選挙の実施や憲法の制定への偏重であり、トップダウンとは、上意下達で介入を進めることであり、アウトサイダー主導とは、平和構築に駆けつける国際機関や各国の ODA 実施機関が幅を利かせることを指す。

これに対する「柔軟・ボトムアップ・インサイダー主導」の柔軟とは、民衆の間で息づく生活に根差した土着の制度や知恵を活かすことであり、ボトムアップとは、民衆による下からのイニシアティブを尊重することを指し、インサイダー主導とは、紛争地域で暮らす人たちが自身が平和構築を主導するという意味である。

「柔軟・ボトムアップ・インサイダー主導」の成功例として、有力氏族の長老たちの交渉によって平和を実現しているソマリランド（1991年に独立宣言したが、国際的には承認されていない）や、イスラエルでユダヤ人とパレスチナ人が共存する共同体「平和のオアシス」などが挙げられている。「定型・トップダウン・アウトサイダー主導」に対するオトセールの批判は、自身の活動家としての実体験を踏まえて辛辣だが（このアプローチを Peace Inc.、紛争地帯から紛争地帯へ飛びまわる援助活動家の世界を Peaceland と称している）、平和構築を成功させるためには、両アプローチの意識的な歩み寄りが重要、と最後にバランスよくまとめている。

本著の出版日は、2021年3月1日。同年2月1日にミャンマーでは国軍によるクーデターが起これ、また同年8月15日にアフガニスタンでは20年ぶりにタリバンが復権した。2023年10月7日から始まったガザ紛争はいまだに激しい戦闘が続いており、最近ではハイチやニューカレドニアでも騒乱の成り行きが懸念されている。なお、現在世界19カ国<sup>4</sup>で紛争が進行中とされている。

そのような中、2022年2月24日、ロシアは突如ウクライナに侵攻した。これはロシアとウクライナの軍隊と軍隊が武力を行使した国家間の全面的な争い、すなわち、久々の

---

<sup>4</sup> 紛争進行中19カ国（世銀2024年度 List of Fragile and Conflict-affected Situations より）：

Afghanistan, Burkina Faso, Cameroon, Central African Republic, Democratic Republic of Congo, Ethiopia, Iraq, Mali, Mozambique, Myanmar, Niger, Nigeria, Somalia, South Sudan, Sudan, Syrian Arab Republic, Ukraine, West Bank and Gaza (territory), Republic of Yemen

<https://thedocs.worldbank.org/en/doc/608a53dd83f21ef6712b5dfef050b00b-0090082023/original/FCSListFY24-final.pdf>

伝統的な戦争の勃発であり、これによって途上国での紛争に対する世界の関心はかき消された。ウクライナ戦争は最悪の場合、世界を滅亡の危機に晒すものであり、今は途上国の平和構築どころではない、ということだろうか。ウクライナ戦争さえ起らなければ、本著はもっと注目を集めていたことだろう。

ウクライナ戦争が長引く中で、また、ガザ紛争の波紋が世界中に広がりつつある中で、さらに世界が戦争の時代を迎えつつある中で、本著はどのような意味があるのだろうか。

それでは「平和構築」という用語の「平和」に今一度着目してみよう。辞書で「平和」をひくと、「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること」と出てくる。辞書としては正しいのだろうが、先の大戦で敗戦を経験した日本人にとっては、「平和」という言葉にはもっと重たいものがある。その「平和」という言葉に真正面から取り組んだ一人に作家の井上ひさしがいた。井上ひさしは、日本国憲法をやまことばで読み直すことを試みた<sup>5</sup>。そして井上は「平和」を「子どもや孫たちと、のびのびとおだやかに生きること」と表現し直した。また、井上は司馬遼太郎のエッセイのタイトル『この国のかたち』を借りて、「日本国憲法」をやまことばで「このくにのかたち」とした。それは憲法がその国の性格を決めるからだ。本ブック・エッセイの冒頭で述べた平和構築をさらに簡潔にいうと、平和な国の国づくり、であり、その大本は憲法ということになる。

それでは、井上ひさしは戦後の日本自身の平和構築、そして国づくりの大本である日本国憲法（前文）<sup>6</sup>をどのようにやまことばにしたのだろうか。

\*\*\*\*\*

#### このくにのかたち（前文）<sup>7</sup>

国民がみな、ひとつのところに集まって話し合うことはできないし、たとえできたとしても、やかましくてなにがなんだかわからなくなるだろう。

そこで私たち国民は、決められたやり方で「代わりの人」を選び、その人たちを国会に送って、どうすれば私たちの未来がよりよいものになるか、それをよく話し合ってもらうことにした。

私たちが、同じ願いをもつ世界のほかの国々のひとたちと心をつくして話し合い、そして力を合わせるなら、かならず戦はいらなくなる。

私たちはそのようにかたく覚悟を決めたのだ。

今度の戦で、つらく悲しくみじめな目にあった私たちは、子どもや孫たちとのびのびと

---

<sup>5</sup> 井上ひさし（絵 いわさきちひろ）、2006、『井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法』、講談社。

<sup>6</sup> （参考）日本国憲法 日英対照表 日本法令外国語訳データベースシステム、法務省 <https://www.japaneselawtranslation.go.jp/ja/laws/view/174/tb>

<sup>7</sup> 改行、句読点以外は原文のまま。

おだやかに生きることが、ほかのなによりも大切であると信じるようになった。そこで私たちは、代わりに国会へ送った人たちに、二度と戦をしないようにと、しっかりとことづけることにした。

この国の生き方を決める力は、私たち国民だけにある。そのことをいま、世界に向けてはっきりと言い、この国の大切なかたちを憲法にまとめることにする。

私たちは代わりの人たちに、国を治めさせることにした。その人たちに力があるのは、私たちが任せたからであり、その人たちが作り出した値打ちは、私たちのものである。これは世界のどこでもそうであって、この憲法もその考えをもとにしている。私たちは、この原則に合わないものはなんであれ、はねのけることに決めた。

私たちは、世界の人たちがみなこわがったり飢えたりせずに、ただおだやかな生き方をしたいと願うのは当たり前だということを、今一度自分に言い聞かせ、どんなことがあっても、そのじゃまをしてはならないと、たしかに決めた。

自分たちのためになることばかり言い立てて、ほかの国をないがしろにしてはならない。これはいつどんなときでも、守らなければならない決まりごとである。この決まりごとを私たちもきびしく守って、日本国のことは、国民である私たちが決め、ほかの国々の主人になろうとしたり、家来になろうとしたりせずに、どこの人たちとも同じ態度でつきあうことを誓う。どんな国でもそうしなければならないと信じるからだ。

日本国民は、これから築きあげようとする私たちの国のほまれのために、ありたけの力を振りしぼって、これまでに書いたことをやり遂げる決心である。

\*\*\*\*\*

日本国憲法が施行されてから今年で 77 年目になるが、やまとことばであらためてその前文を読むと、今日国際社会において様々な分断と対立が深まる中、新鮮な響きさえ覚える。前文に盛り込まれた国際秩序の原則や国づくりの理念は今も妥当であり、途上国の開発や平和構築にかかわる際に、さらには世界戦争の回避を議論する際にも力強い拠り所になりうる。私たちは世界に誇れる価値を持っているのだ。

平和構築は、東西対立の終焉からウクライナ戦争までの 30 年間にわたり、一つの援助潮流となった。今後世界の関心は、紛争経験国の平和構築から、世界戦争の回避に向けられていくのだろう。そのような中で、本著はウクライナ戦争やガザ紛争にかき消されがちな途上国の地域紛争に、あらためて光を当てるものではあるが、あいにくそこで止まっている。このブック・エッセイでは、分断と対立が深まる世界、戦争の時代に入っ

た世界における平和構築を、井上ひさしやコフィ・アナンの言葉を借りて再考してみた。

奇しくも 2021 年に本著が出版された直後に世界は一変した。ウクライナ戦争勃発から 2 年が経ったいま、オトセールは『平和をつくる方法』の続編をどう綴るのだろうか。